

O2-027

小児メタボリックシンドロームに影響する生活習慣因子の共分散構造分析モデルによる検討

柴崎 三郎^{1,2,3}、松原 奎一¹¹ 讃陽堂松原病院、² 香川大学医学部、³ 神戸大学大学院 システム情報学研究所

【目的】

小児期から生活習慣病を予防することにより、成人後の心血管疾患などの発症を防ぐことを目的に、2008年に、日本では厚生労働省研究班から「小児メタボリック症候群の診断基準(対象6～15歳)」(主任研究者：大関)が発表された。その要因の基本である生活習慣は、子どもの頃に身につくものであるため、小児期からの予防活動が重要であり、近年、小児生活習慣病予防検診が全国各地で盛んに実施されるようになってきた。

本研究では、小児メタボリックシンドロームに関する主要因の全体的な影響の関係を明らかにすることを目的とした。

【方法】

小児生活習慣病予防検診を実施し、家族歴・生活リズム・食習慣・運動習慣などのアンケートデータ、体格測定値及び血液検査値などの検診データに基づいて、各要因間の関係を定量的に明らかにする小児メタボリックシンドロームモデルを構築する。

対象：K県M町の全小学校4年生の希望者を対象とした。

時期・人数：平成24年度から26年度の3年間。合計788名(検診参加率97.8%)

統計手法：生活習慣の各要因を構成概念として関係を分析できる共分散構造分析の手法を用い、統計解析用ソフトウェアとしては、PASW statistics 18.0 AMOS 17.0を使用した。倫理的配慮：参加した児童の保護者から、個人が特定されない形でデータの統計的活用について事前に文書で承諾を得ており、検診実施責任者である教育長からも許可を得た。

【結果】

探索的因子分析により4つの因子が抽出され、その4要因、即ち、家族歴、生活リズム、食習慣および運動習慣の関係を、『小児メタボモデル』として1つのモデルにまとめ、適合度指標は、RMSEA=0.033、CFI=0.962と十分な適合を示した。

【考察】

小児メタボリックシンドロームを惹起する要因の決定係数は、「家族歴」：「生活リズム」：「食習慣」：「運動習慣」=6.1%：3.7%：36.7%：2.3%であること、すなわち、食習慣の影響が中心であるが、生活リズムや運動習慣も明らかに関係しており、また、家族歴で殆んどが決まってしまう訳ではないので、生活習慣の改善努力が重要であることが示唆された。

参考文献：松原奎一・柴崎三郎(2013)。今後の健康診断の在り方等に関する検討会(第5回)配布資料3(松原参考人提出資料)、文部科学省。